

はじめに

毎年恒例になっております京大フィールド研の時計台対話集会、前回(第4回)は「むし」をテーマにしましたが、今回のキーワードには「生物多様性」という言葉を選ばせていただきました。そもそも、生物多様性とはなんぞや、ということになりますが、日本も批准している生物多様性条約という国際条約において「すべての生物(陸上生態系、海洋その他の水界生態系、これらが複合した生態系その他生息又は生育の場のいかんを問わない。)間の変異性をいうものとし、種内の多様性、種間の多様性及び生態系の多様性を含む。」と定義されています。要するに「すべての生物のあいだの変異性、それぞれがどういうふうに違うか」ということを、生物多様性といいます。生物が違うというのには、多様なレベルがあり、種が違うというのはもちろんですが、同種の中でも、たとえば人間ですと肌の色が違うとか、いろいろな変異性があります。あるいは、海の生き物と陸の生き物のような生態系の違いというのも変異性には含まれると定義されているのです。

私は、海の生き物が専門ですが、現在、海洋生物の多様性を調べるために、「海洋生物のセンサス」という世界的なプログラムが進行中です。世界七十五の国の、二千人の研究者が集まってこのプログラムを行っています。このプログラムが非常にもしろいのは、多くの方に研究成果を知ってもらいたいということで、CNNというニュースネットワークに自分たちのプログラムのコーナーシャルとして流していることです。

そしてこの研究の成果として、まだまだわれわれは海の生物の多様性を全然分かってない、ということが明らかになってきています。一七〇〇年代からのくらしい、いままでに海の生物の種類が論文として記載されたかをみると、二十一世紀になっても、同じペースで数字が増え



白山 義久

しらやま よしひさ

京都大学フィールド科学教育研究センター長

ています。よく分かってきたら、伸び率が減ってくるはずですので、まだまだこれから先、新しい種類がいくらでも見つかるというのが、海の生き物の多様性に関するわれわれの現在の知見なのです。

私はこのプロジェクトのなかで「NAGISA」というチームを率いて、沿岸生物の多様性の研究をしております。いまのところ、二〇地点くらいのサンプルを採取し多様性を調べました。そのデータはOBISというデータベースに入っています。OBISは他の研究成果も多数収集していて、地域的には世界のかなりの部分をカバーしており、八万種類について三六〇万件の記録が入っています。それでもまだまだ分かっていないことが多い、というのが生物多様性の実態なのです。

もちろん、海だけでなく、陸上も同じようにわれわれの知らないことがたくさんあります。そして今、生物多様性は、人間に、あるいは人間の活動に大きく影響をされています。たとえば大阪湾ですと、大量の有機物が大部分淀川を通して入ってきます。その結果大阪湾の奥は有機物が過剰で、海底は貧酸素の状態となり、酸素が少なくても耐えられる生物だけの世界となります。つまり多様性が減ることになります。

このように生物多様性と人間活動とには、大きな関わりがあることが分かってきておりますが、今回講演いただいた先生方は、そのあたりについて高度な専門的な知見をお持ちで、いろいろな立場から、示唆に富むお話しをいただきました。この報告書をご覧いただき、当日の内容を思い出す一助にお使いいただければ幸いです。